

# 幼児と共にゐるものゝ心づくし

倉橋惣三

苛烈なる戦下に、今年も暮れてゆくといふよりは、年の暮ることなど想ふ暇もないのが、われ／＼おとなの心である。戦争に曆はない。敵等は、こどしのクリスマスを、どこで楽しくしようなど、思ひあがつた寢言を言つたとか小耳にしたが、その夢もぞん／＼砲撃爆襲で破砕せられる。戦争にまつたなく休憩なく、銃後の覺悟にも用意にも、一刻の隙も怠りもあつてはならない。その意味で、われ／＼おとなの心持には、目の前に來てゐる暮も正月もあつたものではない。

しかし、子ども殊に幼い子らに對しての心づくしは、それとはおのづから別である。幼い子らに對する戦下の心づくしは、一面戦下の少國民として、しつかり戦時を生活させると共に、また一面、戦時から彼等の生活を護つてその成育を能ふ限り豊富に充實させてやりたいことである。心に天下の憂ひを抱きながら、われわれが日々幼児と共に嬉戯してゐるのも、この心づくしからに他ならない。來るべき正月、日本の子どもあんなに喜び樂しみ待つてゐるお正月を、戦時下ながら、幼い子らのために、出來るだけ喜ばせてやり、樂しませてやりたいと思ふのも、この心づくしから出る一つの保育ごゝるである。

門松もあるまい。しめ飾りもあるまい。お雑煮の餅もどうだら

うか。その上、職場に忙しい父や母に、年賀の賑でもなく、松の内三ヶ日の休日もあるまい。子らにしても、晴着のないのは素より、お正月菓子もお年玉の玩具もない。元朝早々ラヂオに聴く戦果の數々の前に、それはあたりまへのことであり、子らも、ちゃんど心得てゐることである。が、しかし、といつては、どこかに不徹底感が残るが、だからこそと言はふか、日本の子どもが與へられつとけて來た傳統としてのお正月を、この子らにも、この子どもとしての樂しさと喜びとに味はせてやりたいと、どこかに聊かのいぢらし／＼もまぢつて思ふのである。又それが、幼稚園や保育所の、すなはち、戦下に幼い子らの世界を護るべく委ねられてゐる施設の、大事な一つの任務でもなければならぬのである。

○ 今日、子らを樂しませてやらうとするには、日々のごとくにして、なか／＼苦心がある。殊に、お正月を多少ともお正月らしくするには、容易ならぬ苦心がいらう。そこを何んとか工夫して、個々の家庭では迎へられないお正月の形もつけてやりたいものである。室飾りの物資はないとして、黒板はある筈だし、白墨はある筈だし、赤、青、黄位は仕舞つてもあらう。そこに保母さんのお正月裝飾者としての手腕の振ひ場がある。すこゝろく、かるた、

既成品を玩具屋に求めることはむづかしいとして、さがせば何かの厚紙もあらうし、少々繪の具もどこかにあるだらうし、保母さんの手で、いくつかのお正月玩具が用意出来よう。或は、却つてふだんよりもいゝものが、今日の幼児に適して作られるかも知れない。更に必ずしも玩具を用ゐなくても、いくらでも楽しい遊びの出来るのが、幼稚園の長所の一つであるが、お正月娛樂會のいろ／＼の趣向は、保母さんのお手のものである。率直にいへば、それもふだんのやうに大げさなものでなくていい。この頃の砂糖の足りない幼児食品のやうに、甘さが足りない娛樂でも、幼児は充分満足して呉れる。

たゞ、これらの一切を通じて、物に足りず甘さが少くとも、保母さんの心のやさしさが、やわらかさが、その心づくしが、顔色に言葉に出て、それを補つて下さればいい。それが、今日、幼児と共にあるものゝ心づくしの全部だと言つていゝかも知れない。お正月を幼児らと迎へるに當つても、その用意こそ何よりの用意であらう。

幼児と共にあるものは、常に、幼児と同じ心にあらねばならぬが、同じ心にあるとは、幼児の心についていくだけではない。幼児の心に先立つものでなければならぬ。しかも、先立つといふのは、時としてはかりではない。お正月を、もう幾つ寝ると、待つてゐる子らと共に、暮の内から、その正月を待つてゐてやるのは保母さんの常の心がけであるが、眞に幼児と同じ心になつて子どものお正月の楽しさを自分にも楽しみとする心、これこそ肝要のことである。わけても、戦時の務めて一ぱいになつてゐる保母

さんとして、この心構へは特に忘れてなるまい。つまり、それさへあれば、子らと共に、子らのお正月を、立派に迎へてやれるのである。

## ○

但し、來るお正月が、子どもながらに、戦下の正月であることはいふまでもない。戦時から幼児を護るといつて、戦争を忘れ、戦争を離れてゐるといふ意味では決してない。たとへば、戦下にも出来るだけいゝ食事を子らに與へ、子らの食事をよることばせてやらうと心づくしながらも、食前の「兵隊さんありがたうございませう」を忘れないと同じである。新しい年の初めとして、戦争のことを、更めて幼い心に思はせるのも必要であり、こうして楽しく面白く喜び遊べるのも、「兵隊さんありがたうございませう」であることは、しつかり感しませなくてはならない。

わたし達は、新聞やラヂオの報道などで、戦地第一線の正月のほゝえましい話を聞くことがある。敵を目の前にして、武装も解かないまゝで、しかも正月を正月として迎へて餘裕しやく／＼と興じてゐる勇士達である。殊に、戦陣の邊土の異物を工夫し趣向して、正月らしい形と氣分とを出すところは、月並の正月風景よりも却つて一段の妙味さへ添ふのである。そして、その一と時を、故郷の心になり、恐らくや、子どもの時の心になり、無邪氣な笑ひを聲面一ぱいに浮べて、正月のすが／＼しい心になりきるのである。なんといふ、嚴肅の中のほゝえましきであらう。ほゝえましい嚴肅であらう。これと同じといふのではないが、幼い子らの戦下のお正月の、嚴肅とほゝえましきも、聊かこれに似ると

ころがあるといへようか。

兎に角く、子どもにとつて、その年齢の正月は一生一度である。それを、この厳しい戦下に迎へるのも、なんとといふ意味深いことであらう。その意味深さを思つて、おろそかにしないようにして

やらう。それにしても、この戦下にすく／＼として成長を遂げさせられてゐる幼児らのために、彼ら自らは何も知らない感謝を、深く心にしめながら、方に加へられてゆく、その貴い一歳を祝福してやりたい。

## 幼児集團疎開について

森 脇 要

恩賜財團大日本母子愛育會の二つの幼児の保育施設即ち戸越保育所と愛育隣保館の集團疎開の計畫が毎日新聞に出てから、私は見學の申込や照會の手紙を澤山貰つた。幼児教育の編輯者からも、この計畫や抱負や趣旨を知らせるようにとの依頼を受けた、しがし事は尙その途中にある。まだやつと先發隊の幼児十四名が、疎開先で生活を始めたばかりであつて、まだ／＼疎開を語るべき時ではないのである。併し敵機の帝都空襲は開始されており、幼児の疎開は一刻を争ふ状態となつておる故に、敢て我々の計畫を幼児教育に関心さられる人々や直接保育擔當の保姆諸君に訴へ、幼児の集團疎開計畫の國家的に取上げ、實踐されん事を、共に協力されん事を願つて、この筆を取つたものである。

我々が戸越保育所の集團疎開を計畫し始めたのは、既にこの五月、東京都で幼稚園或は保育所の休園、或は戦時託児所に切替へ

保育する事の危険が考へられるならば、戦時託児所と言へども早晩休止しなければならぬ時が来るであらうし。而もそれはそれ程遠い將來ではないと我々は考へた。而も戦時託児所の子供は、戦力増強上どうしても家庭より託かる事が必要であるとすれば、戦時託児所全體を安全なところに移して保育しなければならぬと考へた。これが幼児集團疎開の第一の理由である、そして七月一日より戦時託児所として切替へ、再出發しつゝ、も一方疎開の方向に努力を續けた。

第二の理由は戦時託児所と必ずしも限らず一般に幼児を疎開する一つの手段として集團疎開を計畫した。幼児の疎開は私は三つの大きな意味があると思ふ。その一つは誰かが、すぐ氣付く様に、第二の國民たる幼児を敵の空襲から守る事である。次の理由は、幼児を疎開させる事によつて、母親が防空、待避、消火の活動の自由を得て、空襲下の家庭を守る責任を充分果す事である。第三